

第24回 歴史リレー講座「聖徳太子と達磨」 東野 治之氏 (H28.9.18)

現在、王寺駅の南側から達磨寺への観光ルートはきれいに整備され、王寺町は大いに力を入れているようです。とはいえ、聖徳太子と達磨との関係について、あらためて話を聞く機会は地元の方といえどもあまりないでしょう。大変興味深いものなので、この機会にぜひ知っておいていただきたいと思います。

聖徳太子といえば、以前から「不在説」がくすぶっています。超人的な活躍ぶりはとても史実とは考えられず後世に創作されたものだ、用明天皇の皇子である厩戸皇子という人物は実在したとしても、逸話はこじつけであるというわけです。明治以前、太子は伝説の人であり信仰の対象でしたが、その後は偉大な政治家、思想家として歴史に影響を及ぼしてきました。年配の方は太子について、中国の文化を積極的に取り入れ推古天皇を補佐した偉人だと教わったはずですが、現代の教科書は太子の業績部分をかなり縮小しています。奇跡的な活躍はさておき、太子研究の本筋は古代の一人物としてどう捉えるかなのです。

そうすると、数ある太子伝の中にどれほど史実が含まれているのかが気になるのですが、やはり『日本書記』以前の史料を含む『上宮聖徳法王帝説』（平安初期）が最も信頼できるでしょう。また、『七代記』（奈良時代末）によると、太子は何度も生まれ変わり、前世（6代）は慧思という中国の高僧でした（慧思後身説）。これは8世紀に遣唐使が中国の文献を持ち帰って広めました。『上宮皇太子菩薩伝』では、題名どおり太子を菩薩とみなしました。ほかにも『上宮聖徳太子伝補闕記』などがあり、これらの集大成として『聖徳太子伝暦』（10世紀）が有名ですが、残念ながら著者や年代についての研究は進んでいません。このように、622年の死後わずか100年で太子という人物は伝説化してしまいました。

太子と飢人との出逢いを描いた「片岡山伝説」は上記の「慧思後身説」を前提として生まれたもので、内容は時代とともに少しずつ変遷を遂げました。原型となる『万葉集』における舞台は竜田山で、太子が出逢うのは行き倒れの死人。『日本書記』では王寺の片岡山に移り、死人は飢者（実は真人＝ひじり）に変化しています。その後の『七代記』で初めて「飢者は達磨ではなかろうか」という注釈がつかます。一方、『日本霊異記』では病人の乞食（聖人＝ひじり）との出逢いは片岡村ですが、聖人が葬られた地は岡本村の法林寺（現在の斑鳩町法輪寺）の守部山です。『上宮聖徳太子伝補闕記』によると、太子が片岡山で飢人と遭遇するのは自身の墓地と決めていた山西からの帰途のこと。飢者は異形の人（聖人か？）とあります。

では、なぜ太子と達磨は出逢う必要があったのでしょうか。彼らは達磨に言及した『七代記』に登場する慧思を介して繋がりがあります。達磨は禅宗の開祖ですが、もともと禅の修行に優れたインドの高僧であり、様々に姿を変えて人々を導く人でした。ある日、達磨は古くからの友人慧思を衡山に訪ねます。20年以上も同じ地で修行を続ける慧思に達磨は、「あなたが訪ねるべき国が海の東にあります。どうか人々のすさんだ心に仏法を説いて導いてください」と勧め、この助言に従った慧思は来世では東の国に生まれ変わろうと決心して生涯を終えます。

「片岡山伝説」で、太子（慧思の生まれ変わり）と姿を変えた飢人（達磨）の出逢いが2人の再会シーンです。『七代記』における慧思と達磨の経緯を知らなければ理解に苦しむ内容でしょう。しかも、実際のところ慧思の死去は太子誕生の5年後ですから2人の生存期間は重なります。この時点で「慧思後身説」は破綻していますが、そういう不可思議なこともあるのだというおおらかな解釈がなされ、多くの人々がこの説を信じるようになりました。

なお、『建久御巡礼記』（鎌倉初期）には「片岡山の麓の堤にある三重の塔に似た廟が飢人（達磨）の墓跡だ」と記されています。達磨寺は、達磨を介して禅宗と太子信仰とのユニークな結びつきで生まれた寺です。その由来を詳しく知るには『元亨釈書』（鎌倉時代）が役立つでしょう。